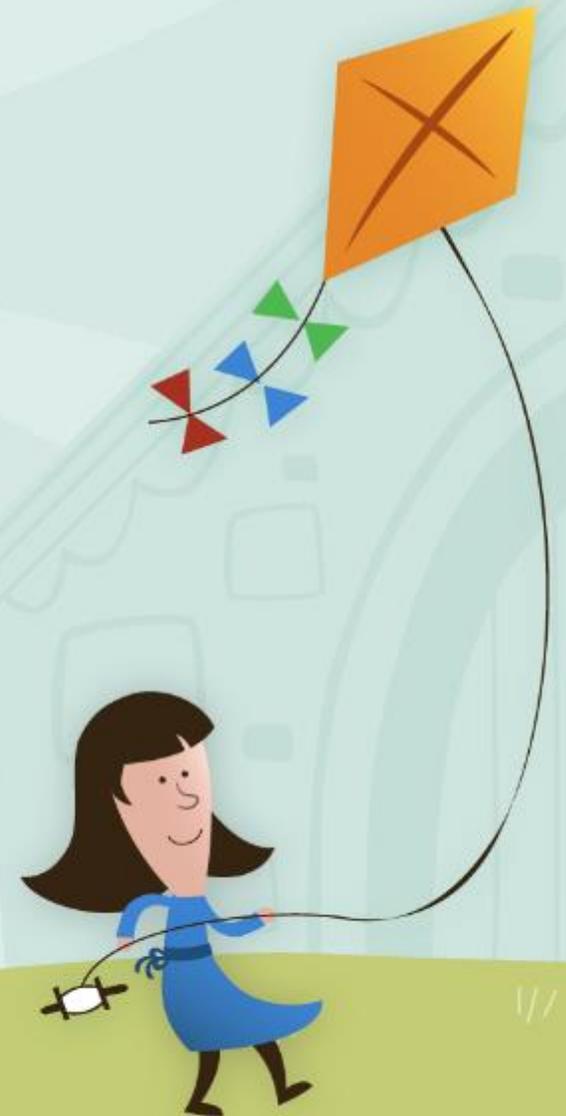


子どもを主語にした学校の創造

上智大学 奈須正裕



1. 学校教育の現状と「令和の日本型学校教育」



学校教育を巡る最大の問題は不登校

- 不登校・・・小学校：10万5,112名 1.7% 中学校：19万3,936名 6.0%
- 子どもたちは、学びたくないわけではない
- 広域通信制高校の活況・・・N校とS校の在籍者数：30,137名
- 不登校の子どもの切実な訴え
- 「あそこには、やらなきゃいけないことと、やっちゃいけないことしかない」
- 学校に子どもたちが「やりたいこと」はあるのか？



- 子どもたちは「やらなきゃいけないこと」があるのも納得している
- しかし、自分たちのペース、自分たちに合ったやり方でやりたい



子どもたちの多様性の量的・質的拡大

- 発達障害の可能性のある子ども 7.7%
- 不登校の子ども 1.0%（令和4年度統計では1.7%、中学校は6%）
- 不登校傾向の子ども 11.8%
- 経済的に困難を抱える子ども（家にある本が少ない 29.8%）
- 海外にルーツをもつ子ども（家で日本語をあまり話さない 2.9%）
- 特定分野に特異な才能をもつ子ども 2.3%

内閣府総合科学技術イノベーション会議 Society 5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ
(chromeextension://efaidnbmninnibpcajpcglclefindmkaj/https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/kyouikujinzai/saishu_print.pdf)



「中間層」に焦点を合わせる一斉指導の限界が表面化してきた

- 小学校4年生の本音：
- 「授業の内容が難しすぎる」・・・27.3%
- 「授業の内容が簡単すぎる」・・・28.2%
- 授業の内容が自分に合っていると感じている子どもは、わずか44.5%？

文部科学省 令和4年度 義務教育に関する意識に係る調査

- 授業が「わからない」「つまらない」・・・学校に行く意味を感じない
- 「そんな学校、無理して行かなくてもいいんじゃない？」と考える保護者・社会



社会構造の変化であって、教師や学校の劣化ではない

- なぜ、これまでずっと、子どもたちは学校に来ていたのか？
- 戦前まで：子どもは労働力だった・・・学校に行けば、辛い労働から解放された
- 1970年以前：学校にしかない素敵なもの、貴重な経験（やりたいこと）がたくさんあった
- 1990年以前：勉強（やらなきゃいけないこと）が、将来への確実な「投資」になった
- 今日：勉強（やらなきゃいけないこと）は、ネットや動画で十分できる

学校での経験よりも素敵な「本物」の経験（やりたいこと）が、身近にたくさんある
さらに「投資」効果も、以前に比べて低下してきた

なぜ登校するのかという問いに、納得のいく答えを出せない大人たち

- すでに、学校は子どもたちの唯一絶対の教育環境ではなくなっている
- 学校の歴史はたかだか150年・・・未来永劫続くと考える方がどうかしてる



学力は安定して高止まりだが、自立できていない

- 全国学力学習状況調査・・・都道府県間でほとんど差がない→順位は無意味
- 国際学力調査 OECD PISA2022
- 加盟37か国中、数学的リテラシー 1 位、科学的リテラシー 1 位、読解力 2 位
- しかも、経済状況等による学力格差も比較的小さい・・・公正な教育の実現
- 学校が再び休校になった場合に自力で学んでいけるか 34位

文部科学省・国立教育政策研究所 OECD生徒の学習到達度調査 PISA2022のポイント

- 学力に余裕があるうちに、**自立した学習者**に育てたい



「令和の日本型学校教育」の構築を目指して (2021年1月26日 中央教育審議会答申)

- 『みんなと同じことができる』『言われたことを言われたとおりにできる』上質で均質な労働者の育成が高度経済成長期までの社会の要請として学校教育に求められてきた中で、『**正解（知識）の暗記**』の比重が大きくなり（8頁）
- 学校では『みんなと同じことを同じように』を過度に要求する面が見られ、学校生活においても『**同調圧力**』を感じる子供が増えていった（8頁）
- 学校の臨時休業中、子供たちは、学校や教師からの指示・発信がないと、『何をして良いか分からず』学びを止めてしまうという実態が見られたことから、これまでの学校教育では、**自立した学習者**を十分育てられていなかったのではないかという指摘もある（13頁）



指導の個別化と学習の個性化

- 多様性への対応と学習者としての自立：「令和の日本型学校教育」
- 子どもを主語にした学校の創造
- 教師が多様性に応じる（指導の個別化）と共に、自分たちに最適な＝必要な学びを子ども自身が判断し、実行できる（学習の個性化）学校
- 子どもの選択・意思決定の機会、そのための試行錯誤を許容する学校へ



天童中部小学校のカリキュラム

	フリースタイル プロジェクト	マイプラン学習	自学・自習	仲間と教師で 創る授業
学習内容	総合	教科		
学習形態	個別最適な学び		協働的な学び	
計画主体	子ども(たち)			教師

- 多様な教育方法の意図的・計画的・組織的な組み合わせによるカラフルなカリキュラム
- 多様性の保障と学習者としての自立を目指す
- 結果的に不登校が最小限で留まる学校



2. フリースタイルプロジェクト(個人総合)



学科課程

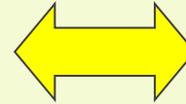
科学・学問・芸術の教育

国語
算数・数学
理科 理数
社会(地歴・公民)
音楽
図工・美術
書道
(保健)体育
(技術)家庭
外国語(英語)・外国語活動
情報

生活課程

生活の教育

生活科
総合的な学習(探究)の時間
道徳
特別活動



知の総合化

現代日本の学校における教育内容の構造

生活教育とは何か？

- 大人がよいと考える生活を「しつける」教育 ×
- 伝統的に望ましいとされてきた生活を「訓練する」「経験させる」教育 ×
- 生活を学問的に研究し、他人事のように高みから「批評する」学習活動 ×
- より納得のいく自らの生き方を求めて、主体的・協働的に生活を創造する教育 ○
- 自分たちが望む生活 = 「やりたいこと」を「創造する」→「プロジェクト」になっていく
- 望む生活を「創造する」（プロジェクトの計画・実行）ためには、学ばなければ、考えなければ、問題を解決しなければならない = 「探究」
- 単なる「生存」を脱却して「生活」を創造できる子どもを育てる = 「やりたいこと」を通して、自己の生き方を考えることができるようになっていく



総合的な学習の多様なあり方

- 学級総合：生活集団としての学級で行う総合
- かつて、信州では「中核活動」と呼ばれてきた：学校生活の「中核」となる「活動」
- 「この子たちと1年間、どんなことをして楽しもうかな」という発想・・・学級経営

- テーマ別グループでの総合：同じ志を持つ者が集まって一定の期間展開する総合
- オルタナティブスクール（cf. きのくに子どもの村学園）でよく実践されてきた
- 学年や年齢に関係なくグループを構成して実施

- 個人総合：各自が自由に好きなことに取り組む総合



子どもの求めが意味するもの

- その子の成長の最前線
- 心理的に安定、自分に自信・余裕がある：外側向かう、他者に向かう、上昇志向
- 心理的に不安定、自分に不安・余裕がない：内側に向かいがち、不足分を埋めたい

- 学ぶ領域の「得意」の発見・深化・・・キャリアの方向性につながることも
- うまいかない、思ったほど楽しくなかったという経験も大切
- 教科の発展に取り組むことも多い
- 不合理な偏見や先入観、学校の因習を刷新する好機

- 自分の「得意」に自信をもつ、各自の「得意」を相互に認め合う
- 自由と自由の相互承認（苫野一徳先生）・・・民主主義の基本



個人総合の展開のバリエーション

- 始期と終期を固定する（天童中部小）
- 前期・後期各20時間、年間40時間（20週）、1回2時間
- 前期は夏休み、後期は冬休みを挟んで実施、最後に発表会
- 開始前に担任と十分に相談・・・児童理解のチャンス

- 始期・終期・探究する期間が各自で異なる（緒川小のオリジナルのオープントイム）
- 毎週2時間程度、年間にわたって実施
- 担任と十分に相談して、OKが出れば探究開始
- 最低4回以上実施



3. マイプラン学習（単元内自由進度学習）



単元レベルで教科の学びを一人ひとりの子どもに委ねてみる



教える教育から環境を整える教育へ

- 全員の子どもが教師の目の前にいない：どうやって教えるの？
- 適切な環境さえあれば、子どもは環境に関わり学んでいく
- もう1つの教育方法としての「環境を通して行う教育」



教科書を時間軸から解き放ち、空間的に表現する



点を結んで



棒を使って



色板を組み合わせて

1年生：図形の構成

幼児教育ではごく普通に実践されている



有能な学び手という子ども観に立ち、環境を通して行う教育を主要な方法としてきたから

学習環境との関わりで自立的に学ぶ(6年社会科)



徹底した情報開示：単元指導案を子どもに手渡す

何を、なぜ、どのように学ぶのかを明確にする

6年理科 自由進度学習「てこのはたらき」
ガイダンスプリント

6年組 名前

「疑問」その1

たかしくんとよしこちゃんのシーソー

見た目はふっくらしてるけど意外に軽い(体重30kg)、気の強い「よしこちゃん」。

見た目は細いけど意外と重い(体重70kg)、気の弱い「たかしくん」。二人はいつも仲良しで、今日もシーソーに乗りました。

すると、よしこちゃんは「ちょっと、アンタ、そんなとこに座ってたらつりあわないでしょ！少しは考えてすわりなさいよ！！」

と、たかしくんに言いました。それを聞いたたかしくんはおろおろするばかり。「どこにすわったらいいの？わかんない」と、今にも泣き出しそうです。

さて、たかしくんはどこに座ったらいいでしょう。



「疑問」その2

くぎ抜きのみみつ

「くぎ抜き」を使ったことある人いるよね。どうして、こんなにかんたんに、くぎがぬけちゃうの？

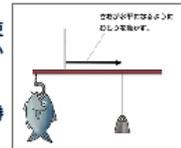


「挑戦」

「さおばかり」を作ろう。

昔から、人々はものを売るときに「はかり」を使ってきました。つりあいのきまりを利用した「さおばかり」です。

竹内先生も「さおばかり」を作ってみました。キミも、正確な「さおばかり」を作って、竹内先生と勝負しよう！



さあ、この学習を終えて、疑問や挑戦をクリアしよう！

・学習場所「第2理科室」

・持ち物

色鉛筆、はさみ、ファイル、教科書



資料2

自由進度学習 理科「てこのはたらき」学習のてびき

名前

目標

(標準時間8時間)

利用可能な時数

単元の目標と構成

評価＝チェックも
多様な方法で

- ・ぼうが水平につり合うときのきまりを調べる。
- ・「てこ」や「てこ」を利用した道具について調べる。
- ★チェック1 学習カード提出
- ・「さおばかり」か「てんびん」を作る。
- ★チェック2 作品の提出
- ・「てこ」のはたらきについて分かる。
- ★チェック3 チェックテスト

学習の流れ

学習内容	教科書	習カード	習カード
① てこのはたらきについて調べる。	P72,73	習カード1	習カード1
② 力点や作用点の位置を変えると、どうなるかを調べる。	P74～75	習カード2	習カード2
③ てこ実験器で、どのようにすればつり合うかを調べ、つり合うときのきまりを考える。	P76～79	習カード2	習カード2
④ てこ実験器で、2カ所以上におもりをつり下げた場合について調べ、つり合うときのきまりを考える。		習カード3	習カード3
⑤ てこを利用した道具について調べる。	P80～83	習カード4、5	習カード4
★チェック1 学習カード1～5を先生に見せる。			
⑥ 「さおばかり」か「てんびん」を作る。	P81、84	習カード6	
★チェック2 作品と学習カード6を先生に見せる。			
⑦ チェックテストをやる。	チェックテスト		
★チェック3 チェックテストを先生に見せる。			
~~~~~ ここまでは、かならず終わらしましょう。~~~~~			
発	☆ 支点が、力点と作用点の間にない「てこ」のしくみを調べよう。		
展	☆ たかしくんとよしこちゃんのシーソーの問題を解こう。		
学	☆ 学校の中にある「てこを利用した道具」を3個以上見つけよう。		
習	☆ 「もの作りカード」を参考にして、つりあいを利用した物を作ってみよう。		
	☆ 「てんびん」や「てこ」についてパソコンで調べてまとめてみよう。		

学習の流れと利用  
可能な学習材等

活動的・体験的な  
学びも取り入れる

早く進んだ子ども  
向けの発展学習

# GIGAスクール構想で整備された一人一台端末と高速大容量ネットワークが学習環境整備の省力化と高度化を実現

自分の学びに必要な情報を  
個別的・自立的に取得



子ども同士で声をかけあい  
自発的に展開する協働的な学び



# 従来型の個別・協働・ICT利用(基本は一単位時間)

一斉で課題提示



一斉で説明



一斉でまとめ



教師の指示で一斉でICT活用

教師の指示で一斉で話し合いや発表

# これからの個別・協働・ICT利用(基本は単元)

単元のガイダンス



単元	単元目標	学習のねらい	学習活動	評価
算数	1. 10以内の数と数直線との関係について理解し、10以内の数の大小を比較し、数直線上に点を描くことができる。	1. 10以内の数の大小を比較し、数直線上に点を描くことができる。	1. 数直線を用いて10以内の数の大小を比較する。	1. 数直線上に点を描くことができる。
算数	2. 10以内の数の大小を比較し、数直線上に点を描くことができる。	2. 10以内の数の大小を比較し、数直線上に点を描くことができる。	2. 数直線を用いて10以内の数の大小を比較する。	2. 数直線上に点を描くことができる。
算数	3. 10以内の数の大小を比較し、数直線上に点を描くことができる。	3. 10以内の数の大小を比較し、数直線上に点を描くことができる。	3. 数直線を用いて10以内の数の大小を比較する。	3. 数直線上に点を描くことができる。



徹底した情報開示



一人ひとりの子どもの判断で多様な学習活動を多様な場で

# 「今後の幼児教育の教育課程、指導、評価等の在り方に関する有識者検討会 最終報告案」(2024年9月20日)

- 幼児教育においては、**子供は生まれながらにして自ら学びを展開していく力を有しており**、幼児は幼稚園教諭・保育士・保育教諭等との信頼関係に基づく安心感に支えられながらその力を発揮していくという考えの下に、幼児が自分を取り巻く環境に自らの動機・意欲をもって関わるという幼児の主体的な活動を確保することを重視している（19頁）。
- 小学校以降の教育においては、現在、**多様な子供一人一人が自立した学習者**として学び続けていけるよう、「令和の日本型学校教育」の実現を目指して、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善につなげていくことが求められている。こうした小学校以降で進められている教育の方向性は、子供それぞれの興味・関心や一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出す観点から、**幼児教育の「環境を通して行う教育」の考え方とつながっている**と考えられ、小学校においても「環境を通して行う教育」を参考に取り入れていくことは有効であると考えられる（20頁）。



# 「今後の幼児教育の教育課程、指導、評価等の在り方に関する有識者検討会 最終報告案」(2024年9月20日)

- かつて、一部の小学校においてそうした取組が試みられた際には、その**環境整備に係るイニシャルコストが課題**であったが、G I G Aスクールの一人一台端末の環境整備が進んだ現在においては、子供が求める経験や知識に自ら自由にアクセスすることが可能であるなど、いわばデジタル学習基盤とも言える環境が整備されつつあることから、「**環境を通して行う教育**」の**省力化と高度化**が可能になっていると考えられる（20頁）。
- このため、小学校教育においては、多様な児童生徒の一人一人の興味・関心等に応じ、その意欲を高めやりたいことを深められる学びの提供に向けて、**新たなICT環境や先端技術も活用しつつ、「環境を通して行う教育」という幼児教育の基本的な考え方を取り入れた教育実践の研究・普及を行っていくことが考えられる**（20頁）。



## 自由進度学習という曖昧な言葉

- 自由進度学習・・・字義通りにとらえれば、子どもが自由な進度で学ぶ学習
- 1 単位時間の中で「7 分間自力解決」を「15分に延長すれば」自由進度？
- 算数の教科書を各自で進めさせれば自由進度？
  
- 早修（acceleration）：必修が終われば、次の単元、次の学年に進む・・・飛び級  
優越感・劣等感が高まる→動機づけ格差が生じる
- 拡充（enrichment）：必修が終われば、単元の学びを活かして発展課題・学び合い
  
- 単元内自由進度学習：単元レベルで「拡充」、豊かな学習環境づくり
- 基本は複数可教科同時進行



# 単元内自由進度学習の作り方

- 教科書を参考にコースを設計
- 他社の教科書を参照・比較
- 学習指導要領、解説を参考に、教科の内容系統をしっかり確認
- 学習のてびき、学習カード、学習環境づくり
- 早い子のために、魅力的な発展課題
- 先生チェックは最小限、先生が見るべき内容にする
- このコース、教材では厳しい子はいないか？
- 厳しい子がいれば、別なコース、別な教材、別な環境を検討
- うまく学べないのは、子どもに原因があるのではなく学習環境が不適合だから
- …「授業のユニバーサルデザイン」の発想



# 教師は何をする？

- 出来ない子にワン・オン・ワンで丁寧について指導するために個別にする？
- 「今日は何をしよう」という構え
- コースと学習環境がよく出来ていれば、教師は何もしなくてもいい
- 手持ち無沙汰？・・・大好きな子どもが一所懸命頑張っている姿を見る
- 指導・支援が必要な箇所を見つけたら・・・教材・環境の見直し・修正



# 教師が教える授業とは何だったのか？

- なぜ、いつも教師が教えてきたのか？
- 知識は偏在し、アクセスは容易ではなく高価だった
- 知識は教師が準備し、教室に持ち込むしかなかった
- その結果、教師から教わらないと学べない時代が長く続いた
- 子どもは教えないと学ぼうとしない、学べないという「神話」の誕生
- 学びの環境の変化・・・ICTの進歩と普及
- 「環境を通して行う教育」へのパラダイムシフトが可能に
- 結果的に、幼保小の連携・接続もスムーズに



## 4. 自学·自習



## なぜ、子どもに出来るの？

- なぜ、子どもに授業が出来る？・・・なぜ、出来ないと思っている？
- 案外と出来る、1年生でも出来る
- 「先生ごっこ」だから・・・なので、子どもは大好き、だから真剣に頑張る
- もちろん、教師がやるレベルにはならないが、教育実習生レベルにはなったりする
  
- なぜ、少しレベルが下がるのに、子どもにさせるのか？
- 教わったことを使ってみる経験の重要性
- 教わっている時はわかったつもりでも、自分たちでやると、思いのほか出来ない
- 教師が普段やっていることの意味がだんだんわかってくる



# 自学・自習の作り方

- 子どもに出来るところと、出来ないところがある
- 単元のなかで、子どもに出来るところを見出し、伝える
- 単元を見通して、自分たちで授業の計画を立てる
- 司会、板書などを分担して進める
  
- 授業の出来に差が出る・・・普段の授業の「鏡」
- 授業を改善すると、自学・自習も少し遅れて改善される
  
- 子どもがする授業は、授業の「入り」が早い・・・導入の意味の再検討
- 議論が活発になる・・・忖度しないから



## 5. 仲間と教師で創る授業



## 3つの新たな学びによって、普段の授業がどう変わるのか

- 自分が「やりたいこと」を存分にやっている子ども
- 単元レベルでの見通しをもち、自立して学べるようになりつつある子ども
- 自分たちでも授業を計画・実施した経験のある子ども
- 内容の習得だけなら、子どもだけでかなり出来る・・・教師がいないと出来ないことは何か？



## まず授業づくりの基本を、1単位時間から単元へ

- 単元（unit）学習者が目的や見通しをもって学べる学習過程のまとめ
- 8時間の授業を、子どもが1つのストーリーとして学べるようにしたい
- 単元を実施の都合上、8時間に分けているだけ
- 毎時間、めあて・ふりかえりが必要とは限らない。不要なら、導入はしない方がいい
- 単元全体として、何を学ぶのか、何ができるようになるのか、時数と単元構成、既習事項は何か、新たに何を学ぶのか等の情報を共有
- パフォーマンス課題：単元の終末に行く、単元全体の学びを活用し、思考や表現の工夫の余地のある課題を設定
- 評価もパフォーマンス課題で行う、評価基準も、事前にルーブリックで共有





電磁気の学習を活かし、IHクッキングヒーターの原理を説明する  
(静岡県御前崎市立浜岡中学校)

A group of students in a science laboratory are working on a project. They are wearing white lab coats and face masks. One student in the center is leaning over a table, looking at a document. Another student to the right is holding a long metal rod. The table is covered with various pieces of equipment, including a metal stand with a blue knob, a glass beaker, and some papers. The background shows white lab cabinets and a window.

自分たちで実験装置を作り、IHクッキングヒーターの原理解明に挑戦  
(静岡県御前崎市立浜岡中学校)

# 教科の内容系統を押さえた授業で、転移可能な学力を

- 自学・自習では、単元のどの部分が子どもたちだけでは難しいか？
- 「見方・考え方」= 教科の本質
- 「主要な概念」と、その教科ならではの「方法」
  
- 系統を確認し、子どもに伝え、既習として活用して未習に挑むような学びにしたい
- 目指すのは、自在に転移可能な学力
- どんな既習がどんな場面でどんな風に転移可能なのか・・・教師が授業で行うべき仕事
- どんな学びでも、必ず既習の何かが使えるはずだと考える子ども
- 教科の「見方・考え方」が身に付いてきて、使える既習の当たりがつく子ども
- 「自立した学習者」に育てるためにこそ、教師が専門性を発揮する

